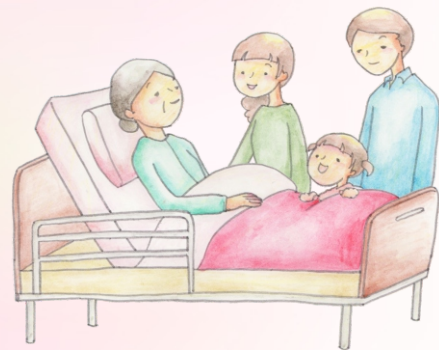


院長の独り言

～『枯れ死』のススメ その2～



先月お話しした『枯れ死』に至る過程は具体的にどのようなのでしょうか。ネットなどでは「餓死」という言葉を使っている人がいますが、私の考えでは、餓死は、食べることはできるのに食べ物がなくて死んでしまうことです。これに対して『枯れ死』（ネットでは自然死というようですが）は、食べ物はあるのですが、生命力が枯渇した結果、食べることができなくなり、衰弱して亡くなることを言います。では、『枯れ死』



は惨めな死に方なののでしょうか。『大往生したけりゃ医療とかかわるな(幻冬舎新書)』の著者である中村仁一先生によりますと、本当に安らかな死に方だということです。その理由は次の通りです。(1) 飢餓状態になると脳の中に麻薬のモルヒネのような物質が分泌されて幸せな気分になります。(2) 脱水状態になると意識がだんだん朦朧としてきます。(3) 呼吸が十分にできなくなりますと体の中で酸素が足りなくなり、その一方で炭酸ガスが増えます。酸素不足によって脳の中にモルヒネのような物質が分泌されますし、炭酸ガスには麻酔作用があります。

以上のような状況では、人は意識が朦朧として、まどろみという状態で死を迎えることになります。末期がんの患者さんでさえも『枯れ死』の場合には痛みを感じることなく、朦朧としたなかで死んでいきます。このようにして『枯れ死』を迎えたご遺体は、やせ細って枯れ木のようにになりますが、最後まで点滴を続けて身体中がむくんでしまったご遺体に比べますと、ご遺体らしいご遺体と言えるのではないのでしょうか。

私はこのような最期を皆様に勧めているのではなく、このような考え方もあって、病院で実践することもできるということを紹介しているだけです。『枯れ死』の大前提として、ご本人とご家族が納得された上で、このような亡くなり方を希望されることが必要です。ひとつの選択肢としてお考え頂ければと思います。

